

UPPP URBAN PLAN PRESS

A media magazine that introduces the future of offices and work styles. We propose new ways of working through office design.

VOL.08

 STRIKE

PICK UP

TOKYO

株式会社ストライク

YOKOHAMA

株式会社ちとせ研究所

NAGOYA

豊田通商システムズ株式会社

OSAKA

安積濾紙株式会社

OSAKA

第一実業株式会社

【東京本社】東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル32F TEL:03-5909-0515 FAX:03-5909-0516
【横浜営業所】神奈川県横浜市中区桜木町1-1-8 日石横浜ビル29F TEL:045-226-3566 FAX:045-226-3567
【名古屋営業所】愛知県名古屋市中村区名駅4-7-1 ミッドランドスクエア17F TEL:052-589-9981 FAX:052-589-9982
【大阪営業所】大阪府大阪市北区角田町8-1 大阪梅田ツインタワーズ・ノース34F TEL:06-6360-6556 FAX:06-6360-6557
【ベトナム設計室】62 Nguyen Chi Thanh Street, Hai Chau ward, Haichau District, Danang City, Viet Nam

<https://urban-plan.com/>

【発行】一級建築士事務所 株式会社アーバンプラン Urban Plan Inc.



TOKYO

株式会社ストライク

M&Aの仲介や経営コンサルティングなどを展開するストライクの創業は1997年。現在では400名超の社員が働く同社も、創業時はわずか数名。その後、業容の拡大とともに新たなオフィスを構築してきた。東京・大手町に立つ地上31階のビルに移転してきたのは2021年。15階の半分、約430坪を執務室兼会議室として使用していたが、予想を上回る成長で手狭になったため移転1年で増床を決定する。2023年3月に13階のワンフロア、約900坪に執務スペースを開設し、同年9月には15階を来客専用エリアとしてリニューアルした。

15階フロアには、エントランスの先に38室もの会議室が並ぶ。さまざまな業種の企業をその色合いにふさわしい空間で迎えたいという思いから、全ての部屋を異なったテーマに基づいて構築した。エントランスの脇の多目的ルームは通常はラウンジとして開放しており、簡単な打ち合わせができるほか、テーブルと椅子の配置を変えればセミナーなども開催できるようになっている。

13階の執務スペースには500名分のデスクを用意した。中央部にリフレッシュエリアやミーティングコーナーなどを置き、両翼にフリーアドレスの執務エリアを配置。デスクが整然と並ぶスタイルだが、通路を広めにとっていることもあり圧迫感はない。内装は白を基調としたシンプルなデザインとしつつ、リフレッシュエリアなどには落ち着いた木目調のものを採用するなどメリハリをつけている。

一方、2室ある役員室はこだわりの空間とした。社長室は装飾を抑えて落ち着いた雰囲気を演出し、風格を表現した空間となっている。常務室は、作業効率を突き詰めたデスク、全幹部を集めた打合せが可能なミーティングスペース、長時間の話し合いを想定したローデスクなど、空間を最大限活用した。家具類はほとんどオーダーで造作したが、その完成度は家具

メーカーから製品化を打診されるほど。また、モニターを2面設置して社内状況が常時把握できる環境を整えるなど、機能面も強化した。いずれも内装のグレードを上げて上質な空間とし、社員の目標となるような設えとしている。

業容を拡大し、オフィスを増床するたびに新しいステージに登ってきたストライク。10年以上にわたりオフィス構築にあたってきた同社執行役員・情報システム部長の奥崎強司氏は、「オフィス構築には終わりがありません」と話し、「今年の考え方が来年も通用するとはかぎりませんから」と続ける。これまで構築してきたオフィスには必ずテーマを設定してきたが、今回のテーマは「無色」。すべての会議室を異なる設えにしたのもその一環で、執務スペースのシンプルな内装も「常に変化に対応できるように」という理念に基づく。その無色は色のない透明ではなく、あらゆる色を内包している。

奥崎氏の目下の心懸かりは、余裕をもって用意したはずの500席が埋まりつつあること。このオフィスも、これで完成ではない。アーバンブランは、そんな終わりのないオフィスづくりを支えてきた最高のパートナーだといい、「何事も真摯に取り組む姿勢と個人の高い能力で、他社を巻き込んだ組織力を発揮できることがアーバンブランの特徴だと考えています。私もこの10年、多くを学ばせて頂き成長できました」と振り返る。ストライクのオフィスも、企業と企業をつなぐ場、人と人をつなぐ場としてよりふさわしい空間へと、さらに変化し続けていくことだろう。



UPP

PROJECT :

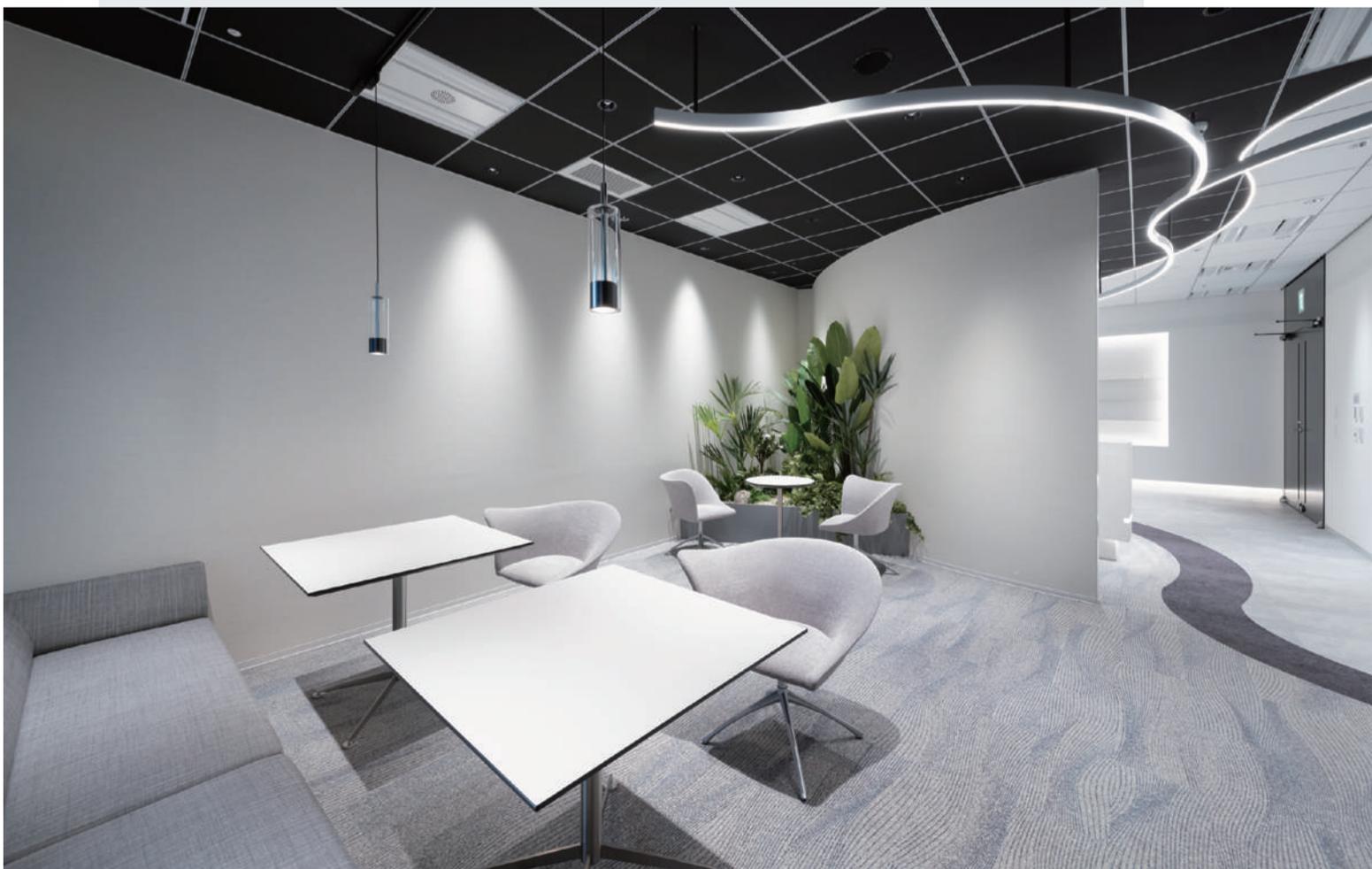
増床・オフィスリニューアル

株式会社ストライク

東京都千代田区大手町1-2-1
三井物産ビル13階・15階
<https://www.strike.co.jp/>



執行役員・情報システム部長
奥崎 強司 様



YOKOHAMA

株式会社ちとせ研究所

ちとせグループは2002年の創業。藻類の育種技術を基礎に、バイオテクノロジー分野で業容を拡大してきた。2023年11月には、多くの研究機関や科学技術系の企業が拠点を置く「かながわサイエンスパーク」内の「イノベーションセンタービル東棟(東棟)」にあった本社機能を、より広いスペースを求めて「R&Dビジネスパークビル(R&D棟)」に移転した。約500m²の新オフィスでは50人ほどが働く。東棟にあった旧オフィスが手狭になり移転を検討していたが、R&D棟にあった空き室への移転が決定し、内装構築にあたって、2023年6月から7月にかけて5社でのコンペを実施した。「一緒に創り上げていく」というアーバンプランの姿勢が決め手となり、新オフィスの構築が始まった。

以前のオフィスは150m²。隣席と近すぎてうるさいときと静かなときがどちらも際立ち、居心地が悪く感じることもあったという。会議室も別の階にあり、不便を感じていた。

「以前のオフィスは狭くて、集中したい人もオンラインMTGしたい人も休憩したい人も、全員同じスペースを使うしかない状況でした。働く場を選べないという課題があり、話がしづらい雰囲気とも言われていました」と振り返るのは、新オフィス構築プロジェクトの中心となった同社の出口悠氏。こうした現状を打開するため、必要な機能を絞り込みながら「ちとせらしい、有機的なオフィス」を実現するためのプロセスを開始した。

まず目指したのが、必要に応じて働く場を選べるオフィス。執務室内はフリーアドレスとし、一般的なデスクのほかウェブ会議用のブースや集中スペース、ミーティングなどに使えるスペースも設けた。特に人気なのがファミレス席。ファミレスの座席のようなボックスシートで、ちょっとした作業や打ち合わせにも活用できる。同社の研究職で農学の博士号を

もつ切江志龍氏は、「さまざまなスペースがあるので、その都度みんなが柔軟に集まって仕事ができる。広くなりましたが、かえってコミュニケーションはとりやすくなったと思います」と話す。

要望が多かった会議室は、4~12名用の4室を整備。外部からの来客を迎える空間として、「ちとせらしさ」を発揮できる場を設えた。「多様性」、「創出」、「拡大」、「千年」と名付けられた各会議室は部屋の形状をすべて変え、多角形にしたりアールをもたせるなど特徴的なつくり。エントランスと執務室を結ぶエリアに、各室がアットランダムになるよう配置している。会議室や通路からは執務スペースを望むことができ、つながり感を演出。ちとせグループをイメージしたビジュアルアートを各所に掲出した。企業イメージを訴求しつつも、オフィスという場にありがちなインダストリアルな画一性ではない、有機的な多様性を意識した構成となっている。

「ちとせ」という社名に込めたのは、「千年続くように」との思い。千年先まで残る技術で、千年先まで人類が豊かに暮らせるように。同社が描く新しい千年は、すでにスタートしている。



PROJECT: 移転

株式会社ちとせ研究所

神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1
KSP R&D棟
<https://chitose-bio.com/jp/>



左: Communication Design Div.
General Manager/出口 悠 様
右: Tech & Biz Development Div.
Senior BioEngineer 博士(農学)/
切江 志龍 様



UPP



名古屋本社



名古屋本社



豊田支店



豊田支店

NAGOYA

豊田通商システムズ株式会社

豊田通商システムズの主業は、システム開発やインフラ整備などの提供だ。社会環境が変化し新しい働き方が浸透するとともに、自社オフィスでもこれを率先して取り入れリニューアルを続けている。2024年には、本社オフィスと豊田支店のリニューアルを実施した。

本社オフィスは、名古屋市中心部に位置するビルの8階と9階を専有している。今回のリニューアルは8階。2022年初頭には9階のリニューアルを実施しており、今回はそのコンセプトを引き継ぎつつ進化させたプロジェクトとなった。

もとの7階は、70席を擁するオフィス。人員の増加に対応して8階を専有する形で増床しつつ、働き方の多様化に対応させるオフィスへとリニューアルさせるプロジェクトが始まったのは2023年の夏ごろ。9階で採用した「公園」というコンセプトを継承しつつ発展させ、新たに「野外フェス」、「アクティビティ」などのキーワードを策定。その要素を加えていくことで構築した。

コンセプトは、エントランスからあらわれる。入り口を入るとまず目に入るのが、フェイクグリーンで彩られた社名板だ。芝生のようなカーペット床と相まって、まるで野外にいるかのような雰囲気を醸している。

執務スペースには約200名分の席を用意した。一部の業務用の固定席の他は、基本的にフリーアドレス。さまざまな業務に使えるデスク席のほか、グループ業務優先エリア、リモート会議用のブース、造作壁で囲われた集中スペースなどを設け、働く場を選べるつくりとしている。曲線形状のデスクを斜めに配置するなどの単調さを省く工夫とともに、公園の中の

森にいるような、自然な感覚を呼び起こされる。

4室設けた会議室の内装も、遊び心を感じさせる。それぞれ「ジャズ」、「ヒップホップ」、「ロック」、「ポップス」という音楽のジャンルの由来する名前がつけられており、室内の意匠もそれぞれの音楽からインスピレーションを受けたデザインとした。室内の色合いやガラス窓に貼られたアートワークなどで、それぞれの音色を表現している。

同時期にリニューアルした豊田支店は、一転して「和」をコンセプトに据えた。日本の伝統模様で四季を表現した壁・床面など、全体的に明るさを抑えた中間色を多用。落ち着きつつもモダンな雰囲気とした。40席ほどのフリーアドレスで、一般的なデスクのほか、景色を眺められるカウンター席、集中できるブース席、打ち合わせにも使えるファミレス型のボックス席などを用意。パーティションなどは設けず、それぞれのエリアがゆるやかにつながるゾーニングとしたことで面積以上の広さを感じさせる。

同社のフリーアドレスオフィスでは、自社開発の座席予約システムを採用している。同じ座席を同じ人が利用し続ける傾向になりやすいことも踏まえ、気軽に使えるような予約不要のスペースも用意した。人の流れを起こし、交流させる取り組みも怠らない。「フリーアドレスですが、ミーティングなど話し合うことが多くなりました」、「他の部門の社員と協業する機会も増えたようです」と話すのは、同社コーポレート本部の村山グループマネージャーと島村氏。創造性を喚起するオフィスは、ハードとソフトの両立が必要だということを、あらためて思い起こさせる。

PROJECT:

オフィスリニューアル

豊田通商システムズ株式会社

【名古屋本社】
愛知県名古屋市中村区名駅4-11-27
シンフォニー豊田ビル

【豊田支店】
愛知県豊田市寿町7-66

<https://www.ttsystems.com/jp>



左: コーポレート本部 総務・法務グループ
マネージャー 村山 定男 様
右: コーポレート本部 総務・法務グループ
島村 一輝 様

UPP



OSAKA

安積濾紙株式会社

「ここを、みんなをあと驚かせる空間にしてほしい」。濾紙(ろし)やフィルターの開発・製造を100年以上にわたって続けてきた安積濾紙。その本社ビルの一隅にある空きスペースを活用できないだろうか。社長が口にした一言で集まった5人の社員は、営業部が2人と、技術開発部、管理部、情報システム部から1人ずつ。所属も経歴もバラバラだったが、「何か面白そうなことができそう」という想いは共通していた。プロジェクトはゼロからのスタート。用途もデザインも自由。予算も工期も未定。そんな白紙の状態から始め、ミーティングを繰り返し、どうにか必要な機能や理想の雰囲気を絞った。「社員同士の交流」と「プレゼンやイベントに使える空間」、「ひとりで作業できる集中スペース」。コミュニケーションの「動」と集中できる「静」。二つの機能を軸とした。デザインはブルックリンテイスト。自社製品を使用した水槽も設置したい。付加する機能は順次決めていくことにして複数の設計会社に相談し、そこで選んだアーバンプランとの、二人三脚がスタートした。

新しいスペースに生まれ変わるのには、物置や更衣室などとして使われていた約150m²の空間だ。要望をもとにした設計案を目にし、ようやく具体性が見えてきたことで、5人からも積極的な意見がでるようになっていた。意見を設計に盛り込み、新たな設計図を目にしたことでまた意見がでる。検討と提案を重ね、1か月の施工期間を経て、2023年8月に新スペース「AZUMI Share Platform」のオープンを迎えた。前述のとおり、内装デザインはブルックリンテイスト。木質を基調にレンガやコンクリートを合わせ、アイアンをイメージした黒色を随所に取り入れて構成した。コンパクトな空間だが、特徴の異なる様々なエリアを詰め込んだ。

入り口すぐに、ふらっと立ち寄って気軽に会話ができる「meet」と「drop in」。ソファを置き、商談にも

リラックスにも活用できる「base」。中央はプレゼンや社内イベントで活躍する「source」。柱の横に大型のハイテーブルを隣接させた「discussion」は、邪魔だった柱を有効活用した。壁向きのカウンター席「solo」、カウンター裏の「focus」には集中して作業するためのブースが並び、その脇には5人が「王様イス」と呼ぶ、座り心地にこだわった一人がけのソファ席。書架には会社の歴史を示すさまざまな小物が置かれ、自社のフィルターを使ったクリアな水槽には観賞魚が泳ぐ。

ひとつの空間に多くの機能を集約しながらも、それぞれに独立性を持たせつつ、適度な一体感も保つ。そのためにこだわったのが、目線だ。ソファ席やカウンター席には段差をつけ、空間を利用する人がお互いの目線を気にせず、それでいてコミュニケーションをとりたい時には自然に会話できるような配置だ。軸となった「動」と「静」が具現化した空間といっている。オープンから約1年。最初は戸惑う社員も多く利用率はそれほど高くなかったが、今では、打合せや集中ワーク、休憩、業務時間外の親睦にも活用されている。東京や名古屋の支店、各地の工場内にもこうした空間を設けたいという声が挙がっているというが、オープン時の反応はどうだったのだろうか。「もちろん、みんなあとと驚いてましたよ」。5人は声をそろえた。



PROJECT :

オフィスリニューアル

安積濾紙株式会社

大阪府大阪市東淀川区小松4-2-15
<https://www.azumi-filter.co.jp/>



左より:技術開発部/下農 健治様 | 営業部
 非鉄・金属グループ/玉村 亮祐様 | 情報
 システム部/松成 優美子様 | 営業部 海外
 営業グループ サブリーダー/森 真理子様
 管理部 係長/能瀬 友美様



UPP

OSAKA

第一実業株式会社

さまざまな機能が複雑に絡み合い、多くの人が活動し行き交う。そして、お互いを補完し合いつつ役割を果たす。もしかしたら、オフィスは街の縮図といえるのかもしれない。その創り方にも、どこか似たところがあるようだ。

産業機械のサプライヤーとして、生産設備や環境設備、その他さまざまなインフラ構築などを支援する第一実業。2023年11月にオフィスをリニューアルオープンした大阪支社は、中之島に立つビルの9階の一部と、10階を占める。そのモチーフは、堂島川の向こうに広がる大阪の街だ。

9階にはガラス張りのエントランスと、同じくガラス張りの会議室が並ぶ接遇スペースを集約した。会議室は12室。そのほとんどが窓からの眺望を活かした作りで、ここが大阪の中心に位置していることを実感できる。エントランスは、木目調の壁やファニチャー、明るい色合いの床材と天井に対し、ガラス枠やドアをブラックに、ガラスにはブラウンのカラーフィルムを施したことで、温かみがありつつ、グレード感のある雰囲気を演出している。

10階は約380坪のオフィススペース。入るとまず目の前にあらわれるのが、広々とした執務空間だ。役員室、教護室、倉庫など個別に設けられた部屋以外に視界を遮るものはなく、キャビネットもデスクの高さに合わせた背の低いもの。窓の外の景色まで一目で見通せる、開放的な空間だ。

大阪支社に在籍する約160人に対し、デスクは将来を見据え200席を用意した。一部の上長席を除き基本的にフリーアドレスで、ボックスタイプのWEBブースやセミクローズのミーティングブースも設けた。意識したのが、社員同士のコミュニケーションの取りやすさ。リニューアル前にもフリーアドレスを導入したものいつのまにか座る席が固定化し、結局普及しなかったという。そこで新オフィスの構築

で取り入れたのが、「街並みのようなつくり」と「公園のような雰囲気」だ。

オフィス内は多くの植栽で彩られ、カーペットの色も所々にグリーンを採用。街なかの公園を歩くような感覚で、働く場までの時間を楽しめる。執務スペースの中心に大通りのようなメイン動線を設け、その沿線にカジュアルなデスクを配置。大通りを歩きながら、道沿いにいる社員とのコミュニケーションが生まれる。大通りの中心には、ひと休みができるバーカウンター。自然とここへ人が集まるように、複合機や共用備品などを集約した。大通りから少し離れたエリアには一般的なデスクやミーティングスペース、WEBブースなどを配置した。機能とエリアの位置関係を関連付けて相関させたことで、「場を選んで働く」という働き方は、いっそう効果的となった。おおまかな配置は碁盤の目を意識した直線状だが、じつはこの縦横の軸線は、建物の平面に対して平行ではなく、少しだけ斜めになっている。直線基調のデザインから単調さを廃して遠近感を強調し、立体感を演出するために採用された設計だ。新オフィス構築を主導した第一実業の移転プロジェクトのメンバーは、「斜めのレイアウトを提案されたときは驚きでしたが、実際に見て納得しました」と口をそろえる。オフィスを訪れた人は面積以上に広く感じることに驚くというが、しかし配置が斜めであることにまったく違和感はないという。

オフィスの入り口から見た景色と、奥に向かうにつれて移り変わる景色。そこにほのかなギャップを感じさせることで、オフィス内を歩く楽しさはいっそう強調される。社員たちは、今日もオフィス内を歩く。街なかの公園を歩くときと同じ清々しさを感じながら。



PROJECT :

移転

第一実業株式会社

大阪府大阪市北区中之島3-6-32
ダイビル本館9階・10階
<https://www.djk.co.jp/>



左: 総務本部 大阪支社総務部 部長/外島 勝 様 プロジェクトメンバー一同